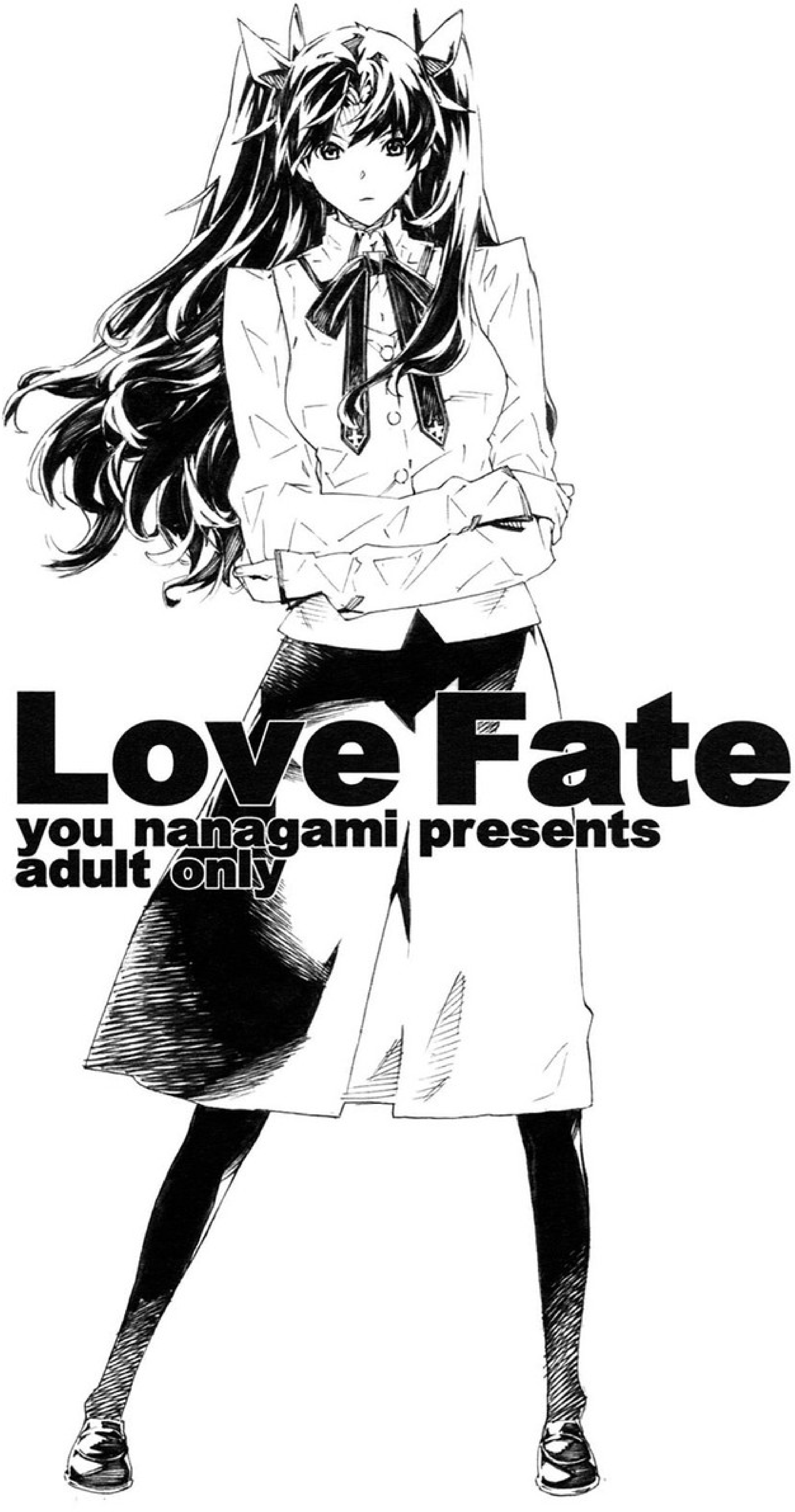
LoveFate
you nanagami presents 2011
adult only

LoveFate

you nanagami presents
sevengods! comics 2011


Love Fate
you nanagami presents
adult only

はあっ・あっ
いいの・んぁ
ああっ
凄い
もっともっと
深くエグって・・
はあっ
きてぇ
もっと
もっと
奥に・・

ひっ
ミイラ男・・
お前らがしたんだろうが
しょうがないでしょ約束したんだから
そっか・・
そっかじゃねぇ調子に乗りやがって

あなたを鍛えるって
いやだからって厳しすぎるだろ
本気の訓練だから士郎も覚悟してるでしょ
いやそうなんだけど・・
他に有効な手段はないのか

あるけれど時間がかかりすぎるから取らない
わ、わかるけど俺に考えさせる権利は？
それこそ時間の無駄と思うけど
・・・
死に近いダメージこそが人の成長を加速させる
それにこの方法なら・・
だからってお前・・

今よセイバー
ま、待てその技は・・
死ぬなよ士郎

しっ死
インビジブルエア

死ぬ!!!
はあっ いい
いいの そこそこ
死ぬ 死んじゃう
だ大丈夫か 遠坂・・
な、何よ あたしのこと 気にしてる場合

衛宮くんは今日の訓練で限界までダメージを負ってるのよ
あたしから今日中に魔力を吸収して補わないと朝には死ぬわよ
お前今死にかけてんじゃん
だいたいこれ自体怪しいぞ
性交によって魔力が譲渡されるって・・
ひっ
ああっ
それが効果的なのもっと真剣になさい
作業みたくするな
せ、セックスを真剣にか・・あまり得意じゃ
違うそっちじゃない

まじめな
魔力供給法なの
まじめか～？
大真面目よ
一見不謹慎かもしれないけれど、この行為自体は実に合理的な六門元素変換率を最大限に有効活用すると言うパラシスト魔法理論にもとずいた多重並行・・・
あーわかったわかったから
まじめに聞け！
そもそも性行為とは子を宿すシステムではなく快楽から分泌されるものを魔力に変換貯蔵されたものを譲渡するために最も適した方法なのよ、それは今での歴史においても実証されてる事で・・・
クド
クド
クド
クド
あーうるせーまじめだからたちが悪いんだろ

じゃあ・・本気でするからな
だったらもう容赦しねェ
し、しつこいわね さっきからそうしろって あたしは・・
もっと効率の良い方法が無いわけではないけど・・
た、ただあんたがそれが効率よく上手くできるかどうか疑問だけど
うるせー そのんなのはやってみないと
本当にやるからな
ホントに・・・
この方法なら合法的に・・
めちゃくちゃ遠坂を犯しまくってやるからな
はあっ

士郎に抱いてもらえるから
はあぁっ・そこ士郎っ
いいっ
はっ激しい壊れちゃう
ああっ
いいそこああっ・・
ひぁあ あっあああ 士郎・・
奥が・・オマンコの奥がビンビンって

はあっ
いいっっ
奥が・・
あっ
ああ・士郎
もっとして
もっと・・
もっと
深く・・
ああ死んじゃう
ああっそこ
そこが来るの
士郎そこいい
そこが・・
もっとして
もっとして
くれないと・・

私を頼む
う、うん・・
わかってる
私頑張るから・・
きっとあいつが
自分を好きになる
ように頑張るから

知ってのとおり頼りないヤツだから
だからアーチャーも・・
ああ俺も・・

うぅっ・こんなとこ
よく見せてるなんて
恥ずかしい・・・
あっ
ああっ奥の奥まで
よく見られてるなんて・・
もっと開けよ
じゃないと
よく見れないだろ
うわっ・・
奥まで本当に
濡れ濡れだぞ
ううっ
あの程度の事で
相当感じてたんだな
淫乱め
ああっ嘘
あたしは
そんな子じゃ

ひっ
んあっ
はあっ駄目ぇ
ああっ
そこ駄目
感じちゃう
ああっ・・
うそ嘘クリトリス
触られただけで
身体が中から
ビンビンしてる
あっ・あん
はあっ・・・
で、でも・・
触られてるだけ
なのに、ああっ・・
触られてるだけじゃ・・
もっと・・
もっと
して・・
もっと・・

ああっ 逝く・・
オマンコ いい・・
ああっ たまんない
ひっ
奥がいいの 奥が気持ちいい
ああっ 凄い
奥が奥が 痺れて・・
はああっ・・ いいの、そこ 気持ちいい・・

はああっいいい・・
もとしてもっと
突いてもっと・・
ひっ・ああっ
ああっいい・・
ああ逝く
ああっ・・
そこ駄目
そこ凄い・・
ひっ
ああっ
深いいい
ああ逝く
逝くっ・・
奥が奥が
麻痺して・・
おかしくなっちゃう

あんあっ・・そんなに揉みしだかれたら・・・
胸を揉まれると遠坂はさらに感じるようになるもんな
そんな・・・あっ・・・
ほら気持ちいいんだろ正直になれよ
ああ・・そうよいいの気持ち良いのもっとして
もっと乱暴に揉みしだいて
はあああっ
んあっああっ・・・
衛宮くんああっ・・・
ギシ
ギシ
ギシ

ひっ深い
はあっ・・
士郎待って
ひああっ・
なに言ってんだ
感じまくってるくせに
ち、違う
こんなに乱暴に
されてるのに
こんなに激しく
されるにの
言ってる事と
身体の反応が
違うぞ
身体の
反応って・・
説得力が
ねーよ
あ、あたしは
セックスを
楽しんでるんじゃ
ないくて・・
全身から・・
細胞のひとつひとつから・・
こんなにチンポを
食いしめてるくせに
ああ待って
ああっ・・・

総ての魔法元素が
譲渡されて逝く・・
淫肉から恍惚を
搾り取るように・・・

もっとして
もっと・・
はあ・死ぬ
死ぬっ・・あっ
り、凛の魔力が
尽きたあと、あたしの
ところに来るのかな？
少しドキドキ
するな・・

「空の境界」の作者がなんで小説を書き始めたのか切っ掛けの本を紹介していた記事を読んだ。それは俺にとって面白い小説を書く人は何に影響を受けていたのかを知りたくなる切っ掛けだった。今でこそ当たり前のことになったのだけれどそれがはじめてしたことだった、それほど印象的だったのは、そこで紹介された本が、綾辻行人の「十角館の殺人」だったから、たった一行で総てがひっくり返るという言葉どうり総てがひっくり返ったのには驚いた、小説はたただ読むものそこには読むだけのものって思っていた俺にとって、驚く事が出来てそれから何冊も読むうちに面白さもわかるようになった、そもそも文章は読めなかったというかなんだろ楽しめなかった今となっては面白くて仕方ないのだけれど、当時の俺は文章を読む行為というのは知識を得る勉強という行為に近く面白さなど一切感じられなかった、知りたいものがそこに文字の羅列としてありそれをただ読んでるだけ、先を知りたい次のページが気になるという感情が無かった、不幸だった、面白さというのを気付かないというのはそれほどまでに不幸な事だっていまは思う、それでも俺は運がよかったのはこの「十角館の殺人」にであった事で、読んでみようかなって思う作家の幅が広がった、その作品に憧れそして小説家になった人がたくさんいるから、その作家の作品を読んでみるとまあ面白いそしてその作家が好きだって言う人を見ると違った意味で面白い、友達に本を読んでる人はいなくても作家が教えてくれるこれは面白いあれは面白いって、その切っ掛けとなるのが「空の境界」だった。あっと驚くネタが「Fate」にもあった、総てのサーバントの英霊が「過去の」「昔の」「神話の」英雄というミスリードに、思い込みに引っかかりものの見事にアーチャーの英霊はびっくりさせられた。今振り返ってみるとそれは無いじゃんって思うのだけれど、作者が作った世界は作者の世界なのだから常識非常識というのは作者が決めることで、そこの他人の固定観念は意味が無いのなって言うのも気付かされた作品だった。月には酸素が存在すると作者が言えばそれは存在する世界なのだ、磁石は「S」と「N」極だけでなくて「M」極が存在するというのも作者が言い切ってしまえば存在するのだ。当たり前のことなのだフィクションというのはそうゆうモノなのだけれど、なかなか気付かないものだ現に俺はきづかなかった、まあ俺は馬鹿だからしょうがないのだけれど、これに気付くともう他の作品を見るのが楽しくて楽しくてしょうがない、どんな非常識を常識としてぶち込んでくるのかって、ただ弱点としてはファンタシーとかSFは設定は凄い世界観は勉強になるのだけれどなんだろオチというのが無い気がする、ミステリーなら犯人と犯人の動機や犯行トリックが存在するからそれらは見せるに値するものであるからそれがオチになると思うのだけれど、前者は・・・そう考えると俺はみたことないなSF小説でオチに納得したものは無いなーって思っていたのだけれど、「Fate」はその考えを払拭させた作品だった。

赤川次郎の「三毛猫ホームズ」シリーズを古本屋で一気に購入し読んだときに思ったのは、五十冊近い本を一週間近くかけて一気に読んで凄く疲れ果てたのだけれど、もの凄く幸せな時間だった。長く続いた本というのはいつまでたっても名作なのなってつくづく思ったのだけれど、その中でも特に俺がすきなのは「推理」「狂死曲」「歌劇場」「心中海岸」「怪談」これらは特に名作だって思う。その中でも「心中海岸」には衝撃を受けた、特の赤川次郎氏のすごいのは読みやすいというか、引っ張らないですぐに答えを出すところだろうと思う。特に飽きてしまうのは引っ張って引っ張って引っ張って最後に伏線の回収でドーンと来るのだろうけれど、そのドーンに辿り着く前に飽きるというか読む事が嫌になる。伏線って餌をたくさん撒くのはいいのだけれどその餌がおいしいのか美味しくないのかわからない結果を見てないから、よくある謎解き本の回答はこの次の問題のあとにとかあるのだけれど、少しはなしてなるべくすぐ見せないようにしてるというのもわかるし、見にくいように天地逆に書いてるのとかもあるけれど、俺に言わせると、面白い面白くない以前にメンドクサイから見ないって感じになってくる、もの凄く完成された形の小説に読む以外の工夫を混ぜるのは気持ち悪いとしか思えない。例えば次々問題を出されるのだけれどそれをいちいち回答をしないでどんどん進んでいくとき、あってるかあってないのかわからないのに進んでいく気持ち悪さに近い。その気持ち悪さが三毛猫ホームズシリーズにはほとんど無いとくに「心中海岸」は凄かった、昨晩主人公が見かけたカップルが心中したのだけれど、それで遺体を確認したところ違うのだ女のほうが違う、誰だこの女の人はそしてそのいなくなった女の人は・・・・と引っ張るのかって思ったけれどそのいなくなった女のヒトがあっさりでて来るその切っ掛けはという感じでとにかく進んでいくのが先に先に読みたくなる。続くという信用なのか続いている作品は名作なのだと改めて思うのだけど、そんなんこんなで今考えてるのは栗本薫の「グインサーガ」をそろそろ試そうかなって思ってる、もの凄く大変そうだけれど同時にわくわくしてる自分がいる。

誌名 「LoveFate」

発行日 2011年6月20日

発行元 SEVENGODS!

作画小説 七神優×廻

印刷所 ねこのしっぽ

無断転載・Web転載・複写・複製禁止
18歳未満お断り

新ホームページアドレス
http://nanagami.srv7.biz/

pixivID 2216974 ← 新刊情報はここにのってます

ご意見ご感想はこちらに
ic110187-5974@tbi.t-com.ne.jp

SEVENGODS!
COMICS 2011